第３章　ＬＩＦＥを活用した介護過程実践に関する調査（ヒアリング調査結果データ）

1　ヒアリング調査の枠組み

ヒアリング調査の基本的枠組みと概要は、以下のとおりである。

●対　　象：６か所の介護福祉士養成校（有意抽出）

日時		対象	実施者
1	令和５年 １２月5日（火） １４：００～	日本福祉大学 久世淳子先生 武田啓子先生 鈴木俊文先生	鈴木真智子（現地） 藤野裕子（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
2	令和６年 1月１２日（金） １３：３０～	和歌山ＹＭＣＡ国際福祉専門学校 嶋田直美先生	品川智則（リモート） 鈴木真智子（リモート） 藤野裕子（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
3	令和６年 1月１５日（月） １３：００～	淑徳大学短期大学部 木田茂樹先生	野田由佳里（現地） 金山峰之（現地） 下川玲子（現地）
4	令和６年 1月１６日（火） ８：５０～	埼玉県立誠和福祉高等学校 中嶋芳乃先生 栗原真理江先生 大久保理沙先生	真田龍一（現地） 鈴木真智子（リモート） 金山峰之（現地） 下川玲子（現地）
5	令和６年 1月１７日（水） １４：４５～	大阪人間科学大学 時本ゆかり先生 水谷真弓先生 玉井美香先生	二瓶さやか（リモート） 鈴木真智子（リモート） 藤野裕子（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
6	令和６年 2月２１日（水） １３：００～	西九州大学 加藤稔子先生	井口健一郎（現地） 武田卓也（現地） 藤野裕子氏（リモート） 金山峰之（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）

●ヒアリング日時・対象・実施者：

●実施方法：対面とリモートのハイブリッドによる実施とした。
本調査研究事業の検討委員及びオブザーバー、事務局により実施した。

●そ の 他：埼玉県立誠和福祉高等学校、日本福祉大学、大阪人間科学大学については介護過程の授業についても見学をさせていだいた。

●調査における配慮・留意点
・事前にヒアリングガイドを送付して、目的やヒアリング内容について情報の共有を図った。

・①ヒアリングは記録のため録画・録音をすること、②目的外では利用しないこと、③報告書の掲載にあたっては個人情報に配慮するとともに、事前に対象者に内容の確認をすることをヒアリングガイドに明記した。

令和5年度社会福祉推進事業
根拠に基づく介護実践を推進するための介護福祉士養成課程における介護過程教育のあり方に関する調査研究事業

ヒアリングガイド

（ヒアリングガイドは、ヒアリング調査が的確かつ滞りなく実施されるよう、
ヒアリングを受ける側、ヒアリングをする側が情報を共有するために作成しています。）

■1 ヒアリング調査の目的

- 介護過程実践の推進に資するため、根拠に基づく介護過程実践につながる教育内容等の方向性を示すことを目的に、調査研究に取り組んでいます。
- 根拠に基づく介護過程実践につながる教育の状況（介護過程の授業に関する教授の内容や工夫）、LIFE（科学的介護情報システム）の視点を活用することによる介護過程教育の深化の可能性等について把握するため、ヒアリング調査を実施いたします。

■2 調査の対象

- 介護福祉士養成校（養成施設及び福祉系高等学校）
- 根拠に基づく介護過程実践につながる介護過程に関する教授の内容や工夫についてお話しをしていただける養成校、あるいはLIFE（科学的介護情報システム）の視点を活用した介護過程教育の実践例、あるいは取組の可能性等を有する養成校
- ヒアリングの対象者は教員を想定

■3 調査方法など

- 実施者 ： ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
  ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
  ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
  ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
- 場　所 ： ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
- 月　日 ： ＊＊月＊日 ＊＊：＊＊＊＊～
- 方　法 ： 以下の調査項目を柱として、半構造化面接の手法によるヒアリング
- お問合先： 株式会社コモン計画研究所　担当：相澤、下川 mail：shimokawa@comon.jp
  東京都杉並区成田東５丁目 35 -15 ザプラザF2 階
  03－3220-5415

■4 調査内容

（1）LIFE について

LIFE に対するお考え、根拠に基づく介護過程を推進していくために必要な教育に活用することへのお考えについてお教えください。

（2）LIFE の要素を活用した介護過程教育について

介護過程の PDCA 流れにしたがい、下表の AB についてお教えください。

	A LIFE の要素を活用した介護過程教育の現状についてお聞かせください	B LIFE の要素を活用した介護過程教育の今後の可能性や期待についてお聞かせください
アセスメント		
計画		
実施		
評価		

（3）介護過程教育に LIFE の要素を取り入れていく上での課題

授業展開、教員側、学生側、その他の課題 についてお教えください。

■5 その他留意点

- 調査結果の活用
  - ✓ ヒアリング結果は、本事業の目的である根拠に基づく介護過程実践につながる教育内容等の方向性の検討、または具体的事例を示すための資料として活用します。
- 個人情報の保護取り扱いについて
  - ✓ ヒアリング内容のまとめ方、その内容については、すべて確認をさせていただき、承諾を得てから報告書に掲載いたします。
  - ✓ 個人を特定した結果の表出はいたしません。
  - ✓ 本事業の報告書には、ご協力者として学校名、職位及び氏名を記載する予定ですが、匿名を希望の場合はお申し付けください。
- 留意点について
  - ✓ 回答できない内容等は遠慮なくお申し出ください。
  - ✓ ヒアリングは記録のため録音をいたします。
  - ✓ 事務局等によりヒアリング内容のまとめ及び分析等を行います。
  - ✓ ヒアリング結果及び関連資料は、本調査の目的以外では利用いたしません。
  - ✓ 一定の保存期間を経て、すべてのデータを消去いたします。　以上

3　ヒアリング調査結果

（1）介護過程教育の課題等

介護過程教育の課題等	コーディング	中項目	大項目
アセスメントのばらつきは確かにあります	アセスメントにばらつき	アセスメントの理解にバラつき	アセスメントの課題
学生によると、病気で自分からコミュニケーション取らない人とか発言がない人っていらっしゃるので、そういう人の情報収集は苦労はしましたという意見があった	情報収集が難しい人		
一部介助だという情報を何となくの感覚で集めてしまっている	一部介助だという情報を何となくの感覚で集めている		
学生もそうなんですけど、すぐサービスを入れます 転倒の危険性があるから車いすを使用する必要がある、転倒の可能性が高いので歩行器を使用しなければならないなど	すぐサービスを入れる	支援やサービスを考えがち	
情報収集の不十分さ、多角的なアセスメントの不十分さ、利用者の主観的な情報をきちんととらえずに、〇〇ありきの計画が立てられていたりと、実施することが目的になってしまっている	利用者の主観的な情報をとらえず実施することが目的に		
左半側空間無視の人の場合であれば、左側の食事が認識できないので栄養不足になるので、右側へ置かなければいけないとかね いやいや、違う	左側の食事が認識できないので右側へ置かなければいけないとなる		
いやいや違うと、右側へ置かないでいいからどうなるので止めなさいと、それが課題だというふうに言っています	課題に行かない		
学生は介護計画、いきなり思い付く、一足飛び	学生はいきなり介護計画にいく		
心身機能・身体構造の情報収集や評価って得意じゃない	心身機能・身体構造の情報収集や評価が難しい	心身機能・身体構造の理解が苦手	
アセスメントにおいて全体を見て優先順位を決めて組み立てるということがちょっとできてないのが 1 つ課題	優先順位を決めて組み立てることができてない	優先順位が決められない	
言葉上で何々できる、何々している、それが違いなんですが、そこも学生が分かりにくい	できる・している活動が分かりにくい	できる・している活動が曖昧	
介護過程というか、ICF の言葉遣いとしてもう考えてほしい できる活動と、している活動を明確に分ける	できる・している活動が分かりにくい		
2 年生の介護過程の例えば特養とかになってくると、している、できるってかなり難しい	特養では、している、できるがかなり難しい		
「している活動」のところと「できる活動」は、「している活動」がちゃんととらえていないとできる視点が養えない	「できる活動」が難しい	できる活動が難しい	
情報整理の活動の真ん中に LIFE をおいて、「している活動」、「できる活動」って記載してもらうようにしたんです、圧倒的に「している活動」が多く、「できる活動」が 2 年生でも少ない	「できる活動」が難しい		
「できる活動」の情報の整理というのは、意識づけが昨年はまだまだ足りなかった	「できる活動」の情報の整理		
健康状態から来る心身機能・身体構造のマイナス面ですね、そういった状況がその方の食事、排泄、入浴などの ADL にどう影響を与えているのかを、きちんと結び付けて判断できる力が必要	健康状態が与える影響	情報の解釈、関連付け、統合が苦手	
生徒が一番つまずいているのは、アセスメントをした後の情報の解釈、関連付け、統合化、その統合化についてどうやって生徒に情報を結び付けて、課題につなげるかというところが毎年の課題	アセスメント後の情報の解釈、関連付け、統合化		
アセスメントのところは何とかいろいろな知識を活用しているんですが、いざ計画となると見えづらい	計画に収集した情報がいかせない	計画に収集した情報を計画に生かせない	計画・実践の課題
介護福祉職は活動や参加にアプローチしていく専門職だと思う、情報をどう活動・参加につなげて支援としてやっていくかというのは勉強が必要	活動にしていくためにどうしていったらいいのか	情報を活動・参加につなげる力が弱い	

介護過程教育の課題等	コーディング	中項目	大項目
実習での実践がどちらかというとADLとか評価的な視点ではなくて、取りあえずレクをやったというところの評価になってしまう	実習での実践が取りあえずレクをやったという評価	レクレーションに偏る	
何をもって評価をするかというところで、私たち教員も何をもってしたらこの結果が出るんだろうかということを教えるのに迷うところ	何をもって評価をするか	評価に関する教授が不十分	評価の課題
評価項目とか評価指標がなかなか教育の中に出てこないところをどうやっていったらいいかなということを課題に感じておりました	評価指標が教育の中に出てこない		
介護福祉士として仕事をしだしたときに、カンファレンスとかで介護福祉士としてこの人はどんな人ですか、しっかりと説明できるようにということで、その全体像の文章化に関しては何回も添削します	利用者を説明ができることが大切	説明する力が必要	説明・言語化の課題
再現性とか言語化といった、説明ができるということを、それこそが専門性の証明であり、根拠であると	再現性、言語化、説明ができることが根拠		
説明とか言語化できるという、そこの専門職としての……根拠の大きな1つの情報になる	説明、言語化できることが根拠の情報になる		
評価がどうしても作文指導になってしまっていたところがあった	評価が作文指導になってしまう		
専門性の証明として、自分たちがやることを説明できたり、言語化できたりする、伝えられて再現性があるということ、これが根拠としてお伝えをされていると	自分たちがやることを説明、言語化できる	言語化が苦手	
言語化、自分の言葉として説明というところまでが苦手で、そこは我々の弱点だと自覚する	言語化が苦手		
介護過程の授業には障害の理解であったり、認知症の理解というテキストを持ち込みなさいというふうに言っています	障害の理解、認知症の理解が重要	他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい	他科目の知識応用の課題
復習として認知症の症状をもう1回調べさせたりとか、介護過程の授業が始まる前は、他科目の復習から入ることもあります	他科目の復習から入る		
ほかの科目での学習、専門的な知識、技術をリアル利用者に結び付けていくというところがうまく結び付けることが苦手で、そこの専門的知識と目の前の利用者を結び付ける橋渡しが必要	ほかの科目での学習、専門的な知識、技術をリアル利用者に結び付けていくとところが苦手		
前にも○○県の高校さんを見学させていただいたときも事例に結構苦労されているというお話をされていた、介護過程を理解するときに事例がないとなかなか理解が難しいと思う	介護過程の事例がないと理解が難しい	介護過程の事例教材不足	事例教材不足
ペーパー事例だとやるけど、リアルになるとここがもう使えなくしまう、使うことを忘れてしまう	リアル事例になると情報や知識が使えない	リアル事例で情報や知識が使えない	その他
介護職がその数値を見て分析できるということも、それによって生活の質が変わるところって絶対あると思うので、そういう気付きができるような学びってどうやたらできるのかと思う	数値を見て分析	数値を読み解く力	
誰もが理解できるような客観的な伝達、要はチームにかかわる、将来チームリーダーとして活躍できるような資質の教育	チームリーダーとして活躍	リーダー教育	
介護の分野ではまだまだ構築が遅れているといわれる学問としての介護学、そういう研究姿勢も介護過程を通して養いながら将来性、将来リーダーを担っていく	将来リーダーを担っていく		
介護は長らく数値にしたらだめだと、主観を大事にみたいなところが長らくあった	介護は長らく数値ではなく主観を大事に	その他	

（2）介護過程の授業の工夫

介護過程の授業の工夫	コーディング	中項目	大項目
必ず複数名で持つ、しかも専任でということをしていまして 2 人以上で持っていました、オムニバスではなくて全 15 回に入ります	専任が複数名で担当	教員体制（専任、複数体制）	教員体制
全員が持つということを念頭に置いて、必ず介護過程の 1 か 2 か 3 は全員が何らか持っているということになります	専任が複数名で担当		
担当教員が重複しているところもあれば違う教員も 学生個々の習得度や進捗状況を連携しながらどうフォローするか、何を確認したらいいのかみたいなところで科目間連携を絶えず行いながら進めている	複数の担当教員		
学生がどうやって学習効果を得ていくのかといったところが必要なところだと思っています そのための教授方法、教育内容を絶えず検討しながら連携	教授方法、教育内容を絶えず検討		
実習での担当者、事例というのは貴重になります それをうまく活用して授業展開していく	実習での担当者事例を活用	実際の事例	事例の効果的活用
介護実践能力を養うために 1 年生の後期に介護過程演習 1、介護実習 1A、B の事例を用いた演習を行っている	実習での担当者事例を活用		
1 年後期では実際の事例を使った介護過程を実際にやっている、情報収集と観察、各論的な事例を使った教育が早い	各論的な事例を使った教育		
実際の事例を使った授業になるって、総論的に教えていく流れではない学び方をしているのは、ある意味で底上げしやすいということがあるかもしれない	事例を使った授業		
実習 1、2 の積み上げをどのようにフィードバックして発揮するのかといったところで相乗効果が得られている	実習をフィードバック	実習のフィードバック	
移動というのが日常生活の基本となると思うので、移動の状態はどうかということを徹底的に分析させます 移動が危なかったら、排泄にも影響があるし、入浴にも影響が出てくるとつなげていくように指導をしています	移動を徹底的に分析	移動介助などの理解しやすい事例	
1 で使った事例を 2 で展開していく、2 で使う事例、そこでは何を教える、3 では何をおさえるべきかというような、そういう階段型のところ	1 で使った事例を 2 で展開していく	事例の工夫（他科目と同じ事例の利用等）	
添削で修正させたりしながら、これを 4 事例します	4 事例、その中で繰り返し学んでいく		
事例は現場の事例、食事と移動のどちらかでまずはやる	事例は現場の食事と移動のどちらか	食事と移動の事例	
学生が持ってくる情報量で一番多いが実習 1 だと、食事と移動、かかわる機会が多いということです	食事と移動		
利用者さんから健康状態、脳梗塞で、脳梗塞から左片まひとか、そういうふうにつなげていく 生まれつきと言うと違います 何で？こんな病気があるからというふうに修正しながら関連図はつなげていきます	関連図から理由を探る	関連図作成による理解	関連図作成による構造的理解
文章化し分析させた後に全体像として関連図でつないでいく 文章化よりも関連図の方が全体像をつかみやすいというのはある	関連図を作成することで理解		
情報と情報との関連性をとらえるときに、ICF の形どったものに情報を入れていくという段階を 1 つ設けておりまして、これが実践しながら ICF のことを理解する 1 つの要素になっていると思って取り入れています	ICF の形に情報を入れていく		
関連図を全体像として関連図で出来上がった可視化された全体像を、それを文章で	関連図で可視化された全体像を文章にする	文章化による理解	文章化による理解
説明できるようにということで、その全体像の文章化に関しては何回も添削します	全体像の文章化		
文章化し分析させた後に全体像として関連図でつないでいく	文章化し分析させた後に全体像として関連図		
アセスメントシートの分析でいろいろの根拠を文章化していく	根拠を文章化していく		
まず活動状況はどうか、その次に心身機能、その次は、その人の思い、参加をどんなに思っているか、環境因子を入れて最後一番右端に情報の解釈、関連付け、統合化というふうに教えています	活動、心身機能、参加、環境因子	アセスメントの順番を工夫	指導方法
心身機能・身体構造障害が起こったら活動にどう影響があるか、という順番でアセスメントをさせている	心身機能・身体構造からアセスメント		

介護過程の授業の工夫	コーディング	中項目	大項目
学生にはなぜこんな状態になっているのか、状況になっているのかという根拠を、理由を重ねて重ねて、それが根拠ということで指導している	理由を重ねて根拠を指導	繰り返しの学び	指導方法
添削で修正させたりしながら、これを 4 事例しますので、その中で繰り返し学習していくというような、そんな形がうちの ICF と介護過程とのつながりといえるかなと思っています	4 事例、その中で繰り返し学んでいく		
アセスメントのばらつきを解消するためにまず個人ワークをさせて、その次にグループワークで、グループももう 3 人、4 人ぐらいの少ない人数でやっています	個人ワーク、その次にグループワーク	個人・グループワークでの気付き	
介護総合演習 1 は実習記録とかプロセスレコードとか実習のフォローアップをしつつ、介護過程の基礎となる情報の整理を含んだアセスメント、介護計画、個別の指導	実習をフィードバックで個別指導	個別指導	
複数教員で、個別指導の厚みも多いと、教育の中で成果があるというのも教育活動の特徴	複数教員で、個別指導		
個別指導が欠かせない	個別指導		
事例というより個人ワークで進めながら事例につなげていっています	個人ワーク		
介護学専攻の授業で生活支援技術のチェックリストをかなり細かく動作項目をあげるという訓練を 1 年生でやっていて、それもすごい影響しているのかもしれない	生活支援技術のチェックリスト	チェックリスト	その他

（3）ＬＩＦＥに関する教育の現状

LIFEに関する教育の現状	コーディング	中項目	大項目
社会の理解等、制度についての授業では学ぶ機会、知る機会はあると思うが、積極的に LIFE のいい面を介護過程の授業の中に取り入れるという段階にはまだいけていない	LIFE を介護過程の授業にはいれられていない	授業の中で触れている	制度や全体像の理解
介護概論で政策、政策のまず理解というところのこれは私の担当ではないのですが、LIFE というところの政策の部分だけを落とし込んでいる	介護概論で政策		
LIFE だけに特化してやっているわけではなく、政策の中の 1 つとして医療・介護データ基盤の整備の推進というところで LIFE の活用が導入されているんだということを伝えている	医療・介護データ基盤の整備の推進		
急ぎ足で LIFE の位置付けというところを教えています 具体的にデータの出方とかを示しているものではなくて、どういうものか、なぜ必要かというところを書いている程度	LIFEの目的程度を教えている		
ケアマネジメント論で入れてもらおうということになった	ケアマネジメント論で紹介		
送り出す先がさまざまであるということも踏まえて、現状、こういうシステムが存在していて、加算が付き始めていて、現場でこれからどんどん導入が進んでいくよという情報提供ぐらい	LIFE があることの情報提供しかしていない		
しっかり押さえてというようなところで少しまとめた副教材、教科書にはない情報が入っています	教科書にはない情報の副教材	副教材でLIFEをとりあげている	
客観的に、どう取るかというとアセスメントツールのことが載っていたり、ICF も項目がきちんと載っていたり、教科書にそこまではないので、そこがこれで補完されている	教科書にないものを補完		
昨年度から一番後ろに LIFE を載せています	LIFE を掲載		
2 年ほど前に本学で学生へのテキストとして、私たちの進め方に合ったものを作ろうということで冊子があり、その中に LIFE に触れている	学生へのテキストの中に LIFE		
介護過程では外部講師を呼ぶ方向で動いている 老人保健施設さんが LIFE をやっている施設さんに話をしていただいた	外部講師を呼び LIFE についてはなしてもらう	介護現場の人が授業で説明	介護現場と連携
老人保健施設の介護士長さんの方に来ていただいて、科学的介護情報システムに基づく新たな介護の在り方というものが始まるよということで話を生徒に説明していただいた	生徒にLIFE事例を説明		
職員の方がどういうふうに利用者さんと LIFE に基づいて介護をすることによって変わっていったか、今後の課題も含めて、現場ではこういうふうに LIFE に基づいた介護を行っているということを説明	LIFE に基づいて介護をすることによって変わったこと		
介護実習で行っている施設さんが、介護計画の中で LIFE のことを重点的に生徒に説明してくださった	介護計画の中で LIFE のことを重点的に説明		

（4）教育にＬＩＦＥを活用する効果

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
入力もしやすい、アセスメントの部分において、生情報の書き出しということに関しては非常に大きく貢献します	生情報の書き出しに貢献	アセスメントの向上	アセスメントへの寄与
解釈を加えるのかというところは、そこが面白さでもあるけど、我々のセンスだったりするんだけど、それがまばらになりがちなんですよね、気付ける人、気付けない人	漏れのない生活課題の抽出につながる		
AI による状況の分析とか、傾向の提案みたいなものがあれば、より高い漏れのないというか、生活課題の抽出ということにつながっていく可能性はあるかなという気はします	気付ける人、気付けない人に傾向の提案		
現場からその人のアセスメントした LIFE よる情報を得られることができれば、それはここから、中庭散歩と考えたのはどれだと、どことどれを使えば中庭散歩になる？と一緒に考えることができるかもしれない	LIFE の項目をもとにアセスメントを再考		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができる	ぶれのない質の高いアセスメントができる		
可能性としては、生徒のアセスメント力がつくんじゃないかなというところと	アセスメント力がつく		
LIFE の項目も少し、こういうものもあるんだよねということの紹介の中に入れながら、最初のアセスメント項目の中に少し部分的に入れて	LIFE の項目を最初のアセスメント項目の中に少し部分的に入れていく		
上向き傾向にあるのか、下降傾向にあるのかというのも瞬時に分かるし、これは本当にアセスメントの正確性といいますか、個人差ではなく正確性が極められるのかなというふうに思います	アセスメントの正確性が極められる		
一部介助には幅がある、見守りといってもどこを見守りの定義にするのか、そこは自分たちができるところ、できないところをしっかり見ていくというところは、その力も必要になってくると思うので LIFE を活用する	一部介助には幅		
実習前の段階で、例えば睡眠時間が少ないとなったときに、何で睡眠時間が短いのかなと、例えば部屋の気温など、目の付けどころがグループワークの中で、これが原因なんじゃない、あれが原因なんじゃないというふうに生徒の中で考えるポイントができやすいかなと思いました	データ化されたことで考えるポイント	アセスメントポイント明確化	
学生からは、LIFEを知ることでアンテナの幅が広がったという意見があった	アンテナの幅が広がった		
介護福祉士として持たなければいけない視点を補完する視点であるということ	介護福祉士として持たなければいけない視点を補完する		
LIFE は、できる活動をどういうふうに明らかにするかをしてくれたら分かりやすいかなと思います、している活動よりもね	LIFE は、できる活動をどういうふうに明らかにするか	できる・している活動の明確化	
食事と移動は LIFE のバーセルとの関係でも、できる、しているというところでも観察項目としてすごくとらえやすい	食事と移動はできる、しているというところとらえやすい		
種別 1 が実習なので、2 に比べると要介護度が低い方が多い、可能性を感じているのは、「している活動」と「できる活動」を見ようと思うと、ある程度自立のある人の観察ってすごく大事	自立の人の観察		
「している」、「できる」の違いをちゃんと見て理解できるようにすることは LIFE を活用したというところの切り口の 1 つ	「している」、「できる」の違い		
LIFE データとどう対応させるかというのってたぶんいろいろな考え方があると思う、1 つ前提は動作、ADL 情報って基本になる	ADL を指標化	ADL を指標化	
データサイエンス的に介護過程に見込めるということを考えると、今の ADL ベースのものをちゃんと指標化してやっていくのはすごく可能性があるなというのは思っている	ADL を指標化		
一つ一つのステップを上っていくように積み重なって、だんだん感受性とか考える力というのが育っていくと思うんですけれども、でもそれが及ばない場合には、データを用いて、例えばこういう生活状況がある中で、利用者さんの体の自立度とかいうことを考えると、こういうことが必要なんだという	データの補完	情報の解釈を補完	
変化とらえきれない我々が、例えばその LIFE による情報の蓄積の傾向によって、AI などがそこに情報の解釈を補填してくれることによって、例えばターミナルの状態に近づいている可能性があるかもしれない	変化とらえきれない我々に情報の解釈を補填		
要は AI 的な情報の蓄積による解釈を、我々が介護過程の展開に導入できるという意味で、中長期的に価値のあるツールであるというとは間違いない	AI 的な情報の蓄積による解釈		
実施していく過程で、記録もしますよね、その記録を補填するツールにもなるわけですよね	記録を補填するツールにもなる		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
一足飛びにはいかないでしょうけど、ステップアップしていく過程の中の教材としては最高かもしれない	ステップアップしていく過程の中の教材	情報を結び付ける教材となる	アセスメントへの寄与
LIFE ということ自体が学生たちに対してステップアップできる教材だというような言葉が出て私たちも現場にこれで働き掛けられるなと思いました	LIFE が学生たちがステップアップできる教材		
私たちってデータシミュレーションでやっているものですから、それがさっきの 3 者の情報だけを見る習慣から、LIFE が入ってきたことによって、もう 1 回、現場に LIFE の情報を見せてやってくださいみたいなことを言えば	LIFE が学生たちがステップアップできる教材	情報を結び付ける教材となる	
学生からは、自分が思っている行動と LIFE の行動が一致すると、こういう表現だ、この人この行動だったと、自分の中でつながるという意見があった	思っている行動とその LIFE の行動が一致		
客観的な数値の情報としてこういう能力がある中で、それをしている活動にしていくためには、かかわり方としてどうしていったらいいのか、活動、参加の向上のために、この方の能力をどう最大限生かしていけるのかというふうに介護職の専門的なアプローチにもつなげていける	活動にしていくためにどうしていったらいいのか	活動、参加の向上のための視点	
そういうところがそういうチェックであったり、LIFE などで数値化されたりするもので情報として私たちが見える共通の何と言うんでしょう、こう見える化	情報として見える化	情報の見える化	
客観的な何らかの数値や誰が見ても判断できる形として情報があると、僕たちもきちんと客観的な分析ができるのかなと思いました	客観的な数値や誰が見ても判断できる情報		
心身機能・身体構造に関する情報が介護福祉職にとっても分かりやすい数値等で分かると、例えばこの人は立位がこれだけ取れるというものが数字上分かる	心身機能・身体構造に関する情報の数値化		
その方がどう改善されたかというのもまた数値として出てくると問題、客観的な数値からスタートした支援がこのように改善されて、QOL 等の向上につながったというふうに堂々と僕たちもほかの専門職に行った支援が説明できるのかな	どう改善されたかが数値として出てくる		
健康状態からいろいろ心身機能状態からもすべて何かこう影響があると思うので、例えば糖尿病であれば血糖値が下がっていたりとか、そんなケースもあるかも分からんので、そこらのところははっきりとした、そういうチェックというか数値化ができたらいいですね	健康状態・心身機能状態の数値化		
LIFE に関しましては、結果が見える形を求められているということで、身体的な評価に傾いているという不安もありながら介護の専門性がどう動いていくんだろうかと感じました、国の指し示す方向は必要で、情報キャッチをして、まずはいち早く私たちが勉強していく、そして教育に入れられるものは入れていかなきゃいけないなというスタンス	結果が見える形を求められている		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができて、そこから情報を解釈して、いわゆる一連の流れに持っていって、ひいては利用者の生活の質というところ	ぶれのない質の高いアセスメントができる		
学生からは、コード同士をつなげるのが、何か自分の中であんまりイメージがなくて、ICF、情報収集だけのイメージが強くて、そこでコード化されて自分で、見たものを自分でつなげていくというイメージ、アセスメントよりも情報収集のツールだなという印象が強いという意見があった	情報収集のツール	情報収集のツール	
アルツハイマー型認知症の利用者に共通する問題点や、情報収集の視点というものが、何らかの形で標準化されていくと、見るべきところがみえてくる、それを利用者の生活習慣や背景因子の全体像に含めながら判断していくかということになる	利用者に共通する問題点	情報収集の標準化	
学生に書かすのではなく、移動の場合はこういうところを押さえておかくというところがあったらなおいい、移動はこういう機能を使います、排泄にはこの機能を使います、食事にはこの機能を使いますというのはいいと思う	押さえておくべきところの明確化		
学生も経験しながら、こんなふうに評価ができるんだということをより多く触れる必要があるんだろうなと思っています	学生も経験しながら評価に多く触れる	具体的な評価につながる経験	評価への寄与
基本ベースは評価をどんなふうに評価をしていくか、それの集合体が事業所の評価になったり、次の目標、計画につながっていくと思う	LIFEの基本は評価	評価しやすい	
介護過程の展開の過程と、その時点における LIFE で上がってくるさまざまな情報をリンクさせることってきっとできます それ評価になるでしょうけど、そういうものなのだという形をつくる	介護過程の展開と LIFE の情報をリンクさせる		
LIFE についてもデータの事例みたいなものがあって、実際の施設で行われていたパターンでもいいんですけど、それを基にグループワークで考えさせて、現場ではこうやっていたけど、でも本当にその介護でよかったかなという視点でもいいと思うんですけど、それを取り組むというのはいいかなという感じです	実際の施設で行われていた事例から評価		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
LIFE がどう動いたとしても、まずは評価ができるということは大事	評価ができるということは大事	評価に LIFE を活用	評価への寄与
リハビリの方もアウトカム評価で ADL を評価していくという方向に進んでおります、介護も何をしたかの話ではなくて、その結果、利用者にどんな変化があったのかを見ていかないといけない時代に	利用者の変化を見ていく時代		
今まで介護過程の展開で評価をしようとやっているんですけど、介護ってなかなか見えないような形で進みますので、そこを見える形にして数値化できるものは数値化していく	評価について見える形にして数値化できる		
一般的になっている評価指標もありますよね、そういうものからまた自作も可能ですので、何かできるだけ一般化されているような評価指標を見せるとか、読ませるとか、教えるという、触れさせるということも大事	一般化されている評価指標をおしえることも大事		
だから評価の多様性というのも LIFE によってもたらされるかもしれないですよね、笑う、笑顔、満足というのは何によって証明されるのか	評価の多様性も LIFE によってもたらされる	評価に LIFE を活用	
おそらく評価にももう少し活用ができると思っています	評価に活用		
何か評価のところで弱いなと実際に思っている	評価が弱い		
評価について、これもうこうだった方がよかったかなというところは授業の中に取り入れていなかったと思ったので、評価の場面でも LIFE が使えるといいのかなと思います	評価の場面でも LIFE が使えるといい		
教員がその利用者さんの LIFE が理解できていれば、評価のフォローはできる、そもそも着眼点が違ったのかという、何か目安というか情報にはなるのでフォローはしやすい	教員が利用者さんの LIFE が理解できていれば評価のフォローしやすい		
生徒は利用者の反応を見て、成功した、失敗だったと、そういうだけじゃなくて、立てた目標に対しての評価、評価の尺度が変わってくるかなと	LIFE であると評価の尺度が変わってくる		
実施、評価とかのプロセスにもつながる	実施、評価のプロセスにつながる	アセスメント～評価の一連性	PDCA への寄与
アセスメントと評価はつながっているので、アセスメントし、計画を立てて実施をし、どうだったかというところで、何か評価票のツールとアセスメント票のツールというところを関連付けてあるといい	評価とアセスメントのツールを関連付け		
少し評価ではっきりと分かるようなツールがあって、それをアセスメントに照らし合わせて、アセスメントのツールを作っていくみたいなこともあると思う	評価とアセスメントのツールを関連付け		
このようなツールを用いてアセスメントをすることによって、ぶれのない質の高いアセスメントができ、そこから情報を解釈して一連の流れに持っていく	評価とアセスメントのツールを関連付け		
たぶん Barthel Index とか、そこまであんまり介護過程で使われてない学校の方が多いと思うんですけど、もしかしたらそういったものも入れていくと、変化というところもキャッチできるでしょうし、これは大事だと思うんです	変化をキャッチする	変化をキャッチする	変化への気付き、支援の変更への寄与
介護過程は、比較ということをあまりしない、厚労省が使っている LIFE の個別のリハの例なんてすごくいいなと思う、結局どれだけ立ち上がりを応援したって、その人のいわゆる食事量が上がらないとだめなんだということに気付く、これは今までの介護士は気付くことができないような観点でもないかなと思う どうすると同じような人がどういう効果が出ているのかという、参照できる例が増えるって大事だと思う	参照できる例が増える	気付きやすい、理解しやすい	
そういうところって教えてはきているけれども、気付けるセンスが物を言うみたいなものもあった LIFE があることで、ここを見ればいい、ここがだめだったらこっちを見られればいいというのが分かる、はっきりしているというのは、みんなが同じように理解する、学ぶといったときには使えるツール	参照できる例が増える		
LIFE に入力した結果を見るという視点で見たときに、だからこの人は、この数値がこうなっているからあれだったんだという気付きにつながっていくというのはすごく感じました	LIFE に入力した結果を見る		
今のしている活動になるので、できる活動と、している活動にギャップがある支援の状況を見直して、この方の立てる機能をどう日常生活の中で生かしていけるのかというふうに、根拠に基づく分析であったりプランを考えていく、重要な情報の 1 つになる	している活動とできる活動にギャップ	支援を見直すきっかけ	
例えば 10 秒立てます、じゃあ、立てるように生活で何か支援できることを増やしていきましょうというようなところだけを僕たちがやるんじゃなくて、10 秒立てるのに今そういう機会がなく全介助を受けている理由は何なんだろうと	全介助を受けている理由に気づく		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
心身機能・身体構造に関する情報が介護福祉職にとっても分かりやすい数値等で分かると、例えばこの人は立位がこれだけ取れるというものが数字上分かる でも実際に生活の場面では立つ機会がなく全介助を受けているとなると、それが今のしている活動になるので、できる活動と、している活動にギャップがある支援の状況を見直して、この方の立てる機能をどう日常生活の中で生かしていけるのかというふうに、根拠に基づく分析であったりプランを考えていく、重要な情報の 1 つになる	支援の見直し	**支援を見直すきっかけ**	**変化への気付き、支援の変更への寄与**
見えない予測、予期せぬ転倒とか、情報からリスクとかも含めて考えていける、そういう見える化というのも情報ですとか、それから評価指標のツールを活用しながらいくと、そこで現実的に近づいていくかなと思いました	見えない予測	**リスクの予測**	
実際の利用者さんというのが分かる実習先もあれば、まったく分からず生徒のこの情報のみで想像していくというところも、数値化されると、会えていない先生も、本人、生徒の情報が足りないと偏るが、イメージしやすかったりする場合もある	LIFE から見える利用者	**利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる**	**教育の全体への寄与**
数値が出ると、こういうふうになっているけど、でも実際はこのぐらいなんだねというのが分かるのは、教員としても指導はしにくくなるということはないと思います	LIFE から見える利用者		
実習対象者の共通認識を生徒と教員がより明確にすることで実習指導の先生方の質だったり、栄養が悪そうだから私だったらここ気になるなという指導ポイントがより輪郭が出てくる	実習対象者の共通認識		
LIFE が現場と教育の共通ツールということで活用できるのであれば、それは今後のこういった展開能力にも反映し得る可能性を持っている	LIFE が現場と教育の共通ツール	**LIFE が現場と教育の共通ツール**	
施設はデータを持っているので、名前を消してどこかのデータを見せて読めるかというのをグループワークをしても、身に付くデータの読み方とともに、こんなものが求められて入力したりアウトプットで出てくるんだなということが分かるということで、このデータを見るということは意義がある	データを見せて読めるかをグループワーク	**いろいろなデータを見る**	
いろいろなデータを見ることも LIFE によってもたらされる	いろいろなデータを見る		
例えば外国人の介護職との連携強化にもなるでしょう	外国人の介護職との連携強化	**多文化でも共有しやすい**	
例えば情報が非常に精査されています、シンプルに	情報がシンプル		
多文化でも共有しやすい知恵である	多文化でも共有		
学生が多様化してきて、言語が違ったり学習能力も全然違うといったときには、分かりやすいものがないとすごく時間がかかるし、一定のレベルまでは持っていけない	学生が多様化		
どんなバックグラウンドの先生でも、標準的に教えられるようなあのシートを作成できる可能性も、そういった LIFE の導入のポジティブな面としてあるのかなとは思いました	違うバックグラウンドの先生でも標準的に教えられる可能性	**バックグラウンドが違う教員の教育の均質化**	
教員もそれぞれバックボーンはいろいろですので、差があるんだろうなと思う	教員もバックボーンにより差がある		
学生からは、LIFE のコード化とかは難しいけれど、あれを見ることでいろいろな人に客観的に伝わりやすいなというのを感じた、という意見があった	コード化	**客観的に伝わりやすい**	
学生からは、言葉にできないと思った観察項目を、客観的に分かりやすいふうにほかの人に伝えられるようになるのが LIFE かなと思ったと意見があった	言葉にできない観察項目		
学生によると、言葉にしづらいとか、何となくこれを見たらいいんだろうな、は分かるけど、どう表現したらいいか分からないと思っている学生、職員さんにとっては、元のコードがあると何となく、確かにこの人、こういう行動しているかもという、何を見たらいいというちょっとしたアドバイスか、参考になるんじゃないかなというふうに思いました、という意見があった	コード化		
項目の整理というのはすごく具体的になっていて、例まで載っている、だから初学者が見てもその項目に対するイメージがつきやすいと思いました	項目の整理が具体的	**具体的イメージがつきやすい**	
例えば情報収集するに当たって、その情報の持つ意味が分かっていないと収集しても使えない、関連させられない、LIFE はそういうような資料も具体的に提示してあって、各項目ごとに分かりやすい、何も分からない学生さんは情報としてとらえやすい可能性は大いにあると思います	各項目ごとに分かりやすい		
今までそういった入り口というのが ICF のテキストには書いてありましたけど、あまり具体性はなかった、そういった意味ではより具体的になっている	より具体的		

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
LIFE の具体的な項目がたくさんあり、使うと学生が考えていることがきちんと文章になるような中身を何か探せたらいい	使うと学生が考えていることがきちんと文章になるような中身	**文章化による理解につながる**	**教育の全体への寄与**
教育では LIFE の情報をこれから活用していくと思うんですけれども、その蓄積された、提供された情報から何が見えてくるのかを思考するところを教えることが大事	蓄積された情報から思考するところを教える	**思考力の向上**	
これとこれを足したら根拠になるというのが LIFE で示されるのであれば、教育もやりやすいと思う	これとこれを足したら根拠になるというのを LIFE で示される	**根拠につながりやすい**	
根拠に基づく介護実践、ツールを活用していくというところと何かつながってくる、LIFE の活用の可能性というところと結び付いていくのではないか	根拠に基づく介護実践、ツールを活用		
根拠を伴って説明しきることができるというふうには、ツールとして使えるような気がいたしますね、教材になるということ	根拠を伴って説明しきることができるツール		
そういう学び方ができるのは何が根拠なのかという明確さはできるので、ある意味ではすごく教育的にはいいことだと思っている	何が根拠なのかという明確さ		
LIFE を意識すると利用者主体になるんだなというのにつながる	LIFE を意識すると利用者主体	**LIFE を意識すると利用者主体になりやすい**	**介護過程をよりよくするツール**
栄養のところなんかは使えますよね、BMI とか低栄養状態とか、この人は食事ね、BMI が上がってきたよねと、それは何がよかったのか 栄養士にそれを助言できているかとか、反対に栄養の方に、調理の方にいろいろ提案ができていく、データ化されてないと現場では見過ごす可能性	栄養のところは使える	**数字で測りやすいデータを効果的活用**	
心身機能、身体構造とかは数字とかで測ることができるという根拠が 1 つ	心身機能、身体構造は数字で測ることができる根拠		
今まで少しぼやっとしいたところを、LIFE が 1 つのツールとして今、導入されていて、それを介護過程をよりよくする、より促進させるために活用できるのではないかという可能性	今まで少しぼやっとしいたところ	**介護過程をよりよくするツール**	
現場で活用されているものを何も知りませんということであると、それは困ったなみたいな声も聞こえているので、LIFE というものが導入されていて、どういったもので、介護過程と結びつけるとこういう生かし方ができるよねということぐらいは学校教育の学んでおくということは、学生の不利益は決してならないのではないか	介護過程に活かせることを知る		
学ぶことが増えるということは、負担にはなるとは思うんですけれども、ただ不利益かどうかというところで見ると不利益にはならないのとは思っている	学ぶことは不利益にはならない		
介護も看護もそれぞれの資格が共通に使えるシートがあると、それを基にして LIFE が組み込まれていたらなおいい チェックというか科学的にチェック項目があって、そこに LIFE がつながる	介護・看護が共通に使える LIFE が組み込まれているシート	**多職種との連携に必要**	**多職種連携**
LIFE は共通言語として他職種の間で事業所の中でも使っていけることになりますので、介護福祉士の教育から LIFE を軽視しちゃうと反対に疎外されるという気持ちでおります	LIFE を軽視すると多職種の中で疎外される		
読むことが介護職は苦手、データを冷静に分析して統合して、こうだからこう、こうかもしれない、だからこうなんだ、こういう理由なんだということをみんなでケース会議とかの共通言語に介護ができるといい	ケース会議の共通言語に		
これを踏まえておかないと発言力がなくなる、多職種連携ができないと思っております	多職種連携ができなくなる		
結局、数字で見ているか、見ていないかというところで自信が、データがないことへの自信のなさみたいなところがあるんだけど、アイデンティティーの確立にも役立つ	多職種連携の中でのアイデンティティ確立		
生活の支援者たる我々と、病気、疾病をよりよい状態に戻していく医療ではアプローチが当然違うが、LIFE という同じツールを多職種が用い、専門職として自分の解釈を伝える、それが仕事に反映されるという未来が訪れれば、実感してほしいアイデンティティに、これを教育の段階からしっかりと根付かせることにつながっていく	多職種連携の中でのアイデンティティ確立		
チームでやることの意味も LIFE によってもたらされる	チームでやることの意味	**チーム形成につながる**	**チーム形成**
ひいては利用者の生活の質の向上につながるものであるということは、うまく用いれば間違いないというは個人的には考えているところではあります	利用者の生活の質の向上につながる	**利用者の生活の質の向上**	**介護過程のアウトカム**

教育にLIFEを活用する効果	コーディング	中項目	大項目
ひいては利用者の生活の質というところにつながっていくというのは間違いがない	利用者の生活の質		
利用者の生活の質というところ	利用者の生活の質	利用者の生活の質の向上	介護過程のアウトカム
利用者を長期的に見ていくこともLIFEによってもたらされる	利用者を長期的に見ていく		
個人的には推進がなされるべきと考えておりますし、それが介護職の業務の効率化、省力化、ひいては利用者の生活の質の向上につながるものであるということは、うまく用いれば間違いないと個人的には考えている	介護職の業務の効率化、省力化にもつながる	生産性の向上	
我々の仕事の業務効率化というところにつながっていくというのは間違いがない	仕事の業務効率化		
こうなんだ、だからだめなのねとかって、単純なところになっちゃうかもしれないですけど、でもそれで納得して進めるという子は出てくる	数字のほうが理解しやすい学生もいる	その他	その他

（5）ＬＩＦＥを教育に活用するにあたっての課題

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
自立度が維持されることによる加算というような言説が間違って導入されてしまうと、現場で ADL が維持されることがお金をもらうためには最優先というような感覚、違和感があると思う、その違和感の調整がうまくいかないと、現場へのさらなる導入が難しいところがある	ADL が維持されることが最優先という現場の違和感	LIFE ありきという認識を助長させない	教育内容
先生たちが懸念されている通り、そこだけに行くというのは全然違うので、そこの根拠を持ってさらにというのが私はすてきだなと思うので、そういうふうにやれるかなとは思ってはいる	根拠を持ってさらに		
どんなツールを使ってもいいんだと思うので、介護過程はしっかり教えるそれに合わせてこんなのもありますという紹介の仕方だろうなと思ってはいます	介護過程にLIFEを使う視点		
介護も看護もそれぞれの資格が共通に使えるシートがあると、それを基にして、LIFE が組み込まれていたらなおいい、チェックというか科学的にチェック項目があって、そこに LIFE がつながる	介護・看護が共通に使える LIFE が組み込まれているシート	使用している書式の見直し、再考が必要	
それが次にどうなっていくかというものを見ていくような短期目標を立てさせていくというようなことも、1 つの流れとして重要なので、様式の見直しもやっていかないといけないなという	LIFEの要素を取り込んだ様式		
学生が立てる書式、うちの演習書式も少し若干見直していかないといけないなという声が出ています	書式の見直しが必要		
様式の見直しということを先ほど申し上げたんですけど、計画の様式になったときに、その評価をどこに持っていくかということで、LIFE を意識した計画要旨にしていかないといけない、計画評価ができる様式にしていかないといけないなということが課題に挙がっています	様式の見直し		
結果を読む、データを読むとか、データをするためにいわゆる世間で言う調査方法とか、何かそういうところをちゃんと踏まえておかないと、いけない	結果を読む、データを読む	データを読む力をどうつけるか	
調査方法みたいな部分ってどこかで押さえておく必要がある、これからはデータに強い介護福祉士になるためには必要かもしれない、そういった科目は一般的な一般基礎科目ではありますけれども、全員が受けるわけではありませんので、そこのところが課題	データの読み方を学ぶ機会		
データをどう解釈するかみたいなところを教育の方でやっていただけると、いいんじゃないかなと思っていて、そのためには、そのデータがないとなかなか難しい	データをどう解釈するかを教育で		
アセスメントとか評価とかのところで、確かにそうしたらデータを読む力が必要ですね、本当に弱い、もう少しストイックに介護がそれを理解できるために、この数字とかをもっとこう教育に	データを読む力が必要		
数値化されることが得意な子、これがあったらぱっと分かる子もいる、何でこの方とこの方、こうやってやり方が違うんだろうというのが分かる子もいれば、余計分からなくなっちゃう子もいるんだろうなとは思ったりはして	数値が得意な子、得意ではない子		
LIFE がとらえているアセスメントと、LIFE がとらえられてないアセスメントも、おそらく介護福祉士は大事にしていかないといけないんだろうなというところ、そこは整理が必要だなということを思っています	LIFE がとらえられてないアセスメントも大事に	数字では表せない内容との精査	
身体的なところに傾いたり、認知症の BPSD のところに傾いたりしているようなアセスメントなので、そこまで行き着かないような小さな発見とか、そういうところを大事にできるような教育もしていかないといけないと思っています	小さな発見を大事にできる教育もしていかないといけない		
文字だけで見るところではなくて生活というところも、きちんと人としてとらえて情報の意味を考えていけるというふうに思いました	文字だけではなくて生活もとらえて情報の意味を考えていく		
その人の生活の質の満足って何かといったところで、効果を測定するのは数値的に難しいというところが大きな 1 点	生活の質の満足、効果を測定するのは数値的に難しい		
すべてデータに基づいたもので介護され、私はそんなふうに思ってないんだけどなというところで、何か利用者さんの思いとずれてしまうことが起こってくるんじゃないかなというのは非常に不安です	利用者さんの思いとずれ		
でも、人が見て感じるということの大切さというのを、私は昔の人間なんですけれど、すべてデータに基づいたもので介護され、私はそんなふうに思ってないんだけどなというところで、何か利用者さんの思いとずれてしまうことが起こってくるんじゃないかなというのは非常に不安です	利用者さんの思いとずれ		

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
本人の言っていること、思い、または言えないことも結構あると思うので、どうこの LIFE の中でやっていったらいいのかな、思いとかも反映できるようなものになればいいのかなと思いました	思いも反映できるようなものに	**数字では表せない内容との精査**	**教育内容**
思いというのは数字では表せないし、一人一人違う、何を根拠としているかといったときに、その人の発言であったり、どういう動きをしていた、どういう表情をしていたと、その人から導き出していく、そこがほかの人に分かるように情報として、文字として書けているという、そういう意味の根拠	発言、表情		
QOL という観点は LIFE は落とし込みにくい	QOL という観点		
介護過程をやることで ADL ベースの根拠と QOL という観点からのいわゆるニーズをベースにするというのは両方やらないと、ものすごい医学モデル的な介護過程になる	介護過程の ADL ベースの根拠と QOL という観点からのニーズベース		
学生からは、参加とか、個人因子は難しいかな、生活歴がその行動とかに影響していたりとか、その方の性格でその行動になっていたりする場合があるので、個人因子が難しいのかなという意見があった	参加とか、個人因子は難しい		
例えば LIFE で自立の観点で 25 メートル以上歩けるとか、実際 25 メートル歩くのを見るかという話になると、介護施設の介護過程に必要な情報と、LIFE で提供が必要な情報が必ずしも全部合うとは限らない	介護過程に必要な情報と LIFE で提供が必要な情報	**介護過程と LIFE で必要な情報が一致しない**	
健康状態に関する情報があったとしても、それがその方の活動や参加にどんなマイナスや影響を与えているのか、そこを理解する学習というものがないと、LIFE にしてもさまざまなツールがあったとしても、明確な根拠としてアプローチ、実践をしていくのも難しい	LIFE のツールがあっても明確な根拠としてアプローチ、実践をしていくのは難しい	**LIFE の蓄積と介護過程教育内容の整理**	
シートの構成をきちんと理解をして LIFE にしても ICF の視点で情報を整理する でもツールとして活用していかねばならないので、非常に教員の教える側の力量が求められるような気がします	LIFE を ICF の視点で情報整理		
まずどんな形で見せるか、それを踏まえてアセスメントをさせるというようなことを意図するために、どういうふうにデータを入れ込んでいったらいいかなということが検討課題だと思っています	どういうふうにデータを入れ込んでいったらいいかが課題		
A さんのどの部分を LIFE の視点、LIFE の評価票でとらえることができるのかということの整理が必要、それから A さんの介護の計画を立てていくときに、LIFE がどの部分に貢献できるのかということを整理していく必要がある	LIFE の視点の整理が必要		
介護は介護の視点でその人を見る、このときはどこを見たらいいんだとか、その数字だったらどうするみたいな何か論拠につながる部分が一部分あるといい	論拠につながる部分があるといい		
解釈の加えられていない生情報、ここから意義を見いだす 意図を見いだすのが我々の仕事であるという部分を単純化して伝え、それが現場でどういうふうになるんだということで、LIFE の情報を見せて、この人、今こういう状態にあると、何が起こっているか想像できる？というようにしていく	アセスメントの情報と LIFE の情報をつなぐ		
どういう蓄積の中からここに至っていて、それがどう変化していったら将来像としてはこういう可能性があるとか、例えば筋力がこれ以上、このまま安静状態が続けば、今以上に筋力の低下、移動能力の低下などにつながってしまう可能性があるみたいなところに、よりリアルにつながっていく	LIFE の蓄積と介護過程を連動		
LIFE に使われている項目だったり、指標、こういったものの情報も今、たぶん Barthel Index とか、そこまであんまり介護過程で使われてない学校の方が多いと思うんですけど、もしかしたらそういったものも入れていく	Barthel Index などの LIFE の項目		
実施は PDCA の Do、私たちの実施というのはチームが皆同じ均質の再現性を持ったケアをして、それがきちんと記録をされているということが実施、先ほどの中庭散歩、それを記録といったときに「中庭散歩しました」じゃない、本人の表情、疲労感、長すぎたなと思えたのはなぜかというところも記録をしなければいけない、というようなところの根拠にも LIFE の情報が寄与する可能性はある	記録の根拠に LIFE の情報が寄与する可能性		
1 人の人の全体像を、LIFE だけで語れることはできないというのは見えている、ただとらえるときに、この部分については LIFE の指標が使えるかもしれないという点が明らかになると	LIFE の指標が使える部分の明確化		
ICT を含めて、使いこなすというところに特化した教育をこれからしていかなければ、リーダーシップを取る人材になれないと体感している	使いこなす教育がリーダーに必要	**リーダーとして LIFE を使いこなす教育**	

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
例えば学生が持ってきた利用者の情報を介護過程の授業の中で、個人の作業として入力するツールとして、教材として、要素を抜き出した、基礎的なものとして LIFE というこのようなものの見方、情報ツールを、アセスメントツールを使っているんだよというシステム紹介のための教材として全国の学校で共有できると	教育の場で実例の LIFE の情報を活用	LIFE の目的を現場と教員が共有	現場と養成校の連携
確かに多くの施設がこれを用いるということは、そこに送り出す我々は、それをベースにした教育ということに振り切ることができます	多くの施設が用いるということを意識		
現場の方たちの肌感覚も含めて、正直なところ負担感が強いものになっている、義務化されてしまうということになれば適応しかねる、利用者、我々にどのようなメリットがもたらされるのかというのを実感できていない状況は明らか	利用者、介護職へのメリットが実感できていない		
LIFEが何のために存在しているのかというような目標値、落としどころ、着地点を、誤解のないように現場の方たちと共有し、教員もそれを誤解のないように、苦手意識を取っ払って受け入れやすい土壌をつくる、現場の抵抗感は想像以上に存在するのが現実	目標値、着地点を現場の方たちと共有		
改善しながら継続していく中で、どんな恵みが利用者、職員にもたらされたのか、それが事業所にどんな恵みをもたらして、それが我々の職業の社会的な評価の向上にいかにつながっていくのかということを説明できるような努力がなされればうれしい	職員、事業所、職業の社会的な評価の向上につなげる		
本気で僕らはこれを活用したいと思うのであれば、現場、それから学校への丁寧な、間違いのない、誤解のない情報提供というのは試行錯誤し続けなきゃいけないのかなという気はする	現場、学校への間違いのない情報提供		
例えばそういう知見を持った人たちを紹介するような情報を集約したところがあると、例えば LIFE について、現場での実践事例についてお話をいただきたいみたいなことで、リストがあって、その方にアポイントしてもいいリストみたいなものがあると、個人的にはうれしい	LIFE の実践事例についてお話をいただける現場リスト		
実習施設、実習指導者さんで意見交換をしたところ、多くは活用できてないという意見、それはデータが読めないからできないだけだと、いろいろな意見があった 実習生を送り出す施設さんは、そういう状態	多くは LIFE を活用できてないという現場の意見	現場・介護実習との連携	
実習先がこういうことに関与しておられたらフィードバックをされていたら、また、実際に見させてもらったりするということもできるかと思いますので、実習との連動というのはあるなと思っています	実習との連動というのはある		
施設の側も LIFE を理解をされているとか、扱っておられるのは管理者であったり、上のほんのごく一部の方であって、一般の介護職には下りてきていないんだろうなと思いました	施設も LIFE を理解をされているのは一部		
こちらで学生がいろいろな知識を入れていっても、実習先で具体的に個々につながっているんだというようなところを実習で身に付けることができなかったら、絵に描いた餅になる	実習先で具体的に身に付けることができない可能性		
私たちも、施設サイドも、それぞれに底上げを図っていってというところが、求められているんだろうなと思います	LIFEの理解		
不可欠なのが実習先施設での介護過程の教育の連続性	実習先施設での介護過程の教育の連続性		
もしかしたら教育の方が LIFE の内容を先行するという可能性もあるのかなというふうに、管理者は LIFE をご存じだと思うんですけれども、現場の職員さんは実習生が LIFE を含めた介護過程を追っていったときにどんな指導ができるか	現場は実習生が LIFE を含めた介護過程を追っていけるか		
実習先と連携してデータをもし活用できるのであれば半年前との違いを見て、あの人はこうだから変わったんだよねみたいな、個別的な把握みたいなものができると素晴らしいなと感じました	実習先と連携してデータを活用		
企業とかがアセスメントツールなどは競争するように開発をして、いち早く導入している施設などもあって、それらと LIFE との整合性、バランスはどうなのかというようなところも、問題としてあるんじゃないか	現場での活用		
完全に出来上がってないところがあったり、施設さんによっても、かなり温度差があるというのは感じていて、何かそこも難しいので、私たちも完全に分かってない、施設さんも強い施設さんもあれば、まだというところもある	施設によって温度差		
LIFE を取り入れるということに関しては、全国平均と比較してとなって、こういうことが理想的なんだろうなというイメージもわきやすくなるような気がするんですけど、ただ現場の施設さんがそれを取り入れてないと、生徒が実際、実習に行ったときに批判につながらないかなと	現場の施設がそれを取り入れてない		

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
こういう面ではよかった、次回はどういうふうな工夫をするという話はするんですけど、実際のところ利用者さんと私も話はできない、職員さんの話を聞いて、生徒がやった介護計画によってどうだったかという話をお聞きすることができれば、継続性につながる	生徒の介護計画によってどうなったか聞けない	現場・介護実習との連携	現場と養成校の連携
職員さんが LIFE に基づいたものによって指導、これはこうだからこういう視点もあるんじゃないというのがもしあるとするならば	職員が LIFE に基づいたものによって指導		
根拠を持って職員さん側は説明をしてくれると、たぶん施設さんと実習生と学校の三者の基準ということですね、共有ツール	施設と実習生と学校の共有ツール		
実際にどんどん積み上がっていっても、事業所にデータ提供とデータの確認でひもづくので、教育現場でそれが見えるわけじゃない、そうしたら教育に使えるのに限界があると思う	介護現場のデータ		
総合実習が集大成の場になる、施設さんとの連携、共同というのが必要不可欠になる、いくらいい LIFE の教育をしても、そこで実際に使えないとなると、やっぱりすごくそこはそこで難しい	介護現場での浸透		
学校で介護過程を学んで、現場でもそれをつなげてしっかり、そういう方を専門として実践していくというところは非常に大事	介護現場での浸透		
実習指導者交流会とかで何かできるといいかもしれない	実習指導者交流会で何かできるといい		
シートの構成をきちんと理解をして LIFE にしても ICF の視点で情報を整理する、でもツールとして活用していかねばならないので、非常に教員の教える側の力量が求められるような気がします	情報を整理、ツールとして活用する教員の力量	LIFE を活用する教員の力量	教員の理解
教員側の課題として、教員が LIFE を触ったことがないので、自分たちが携わったものは経験も含めて伝えやすいが、触ったことがないものを知識だけで伝えるというのが難しいという意見が出ました	自分たちが触ったことがないものを知識だけで伝えるのが難しい		
私たちも勉強しなきゃいけない	LIFEの理解		
教育に入れるからには、LIFE 自体の目的、認知度、そういったところがもう少し客観的にないと、教育に入れるといったところにばらつきが出てしまいます	LIFE 自体の目的、認知度	教員の共通認識	
可能性もある反面、ほかの先生方がおっしゃっていたようなテキストのこととか、時間的なこととか、やっぱりまずは教える側の教員が共通理解しないと、FD はちょっと LIFE について話すなど、FD で LIFE について話す取組	教える側の教員が共通理解		
LIFE を現場でどのように活用されているかなかなか聞くチャンスがなかった	LIFE を現場でどのように活用されているか聞くチャンスがなかった		
個人のフィードバックが出てくると、事例の示し方も違ってくるのかなということ、また、そこでもう 1 回検討が必要かもしれないなということを思っている	個人のフィードバックが出てくると事例の示し方も違ってくる	LIFE の個人フィードバックの活用	事例
実際に LIFE を入力する画面というものを見てみたい	LIFE の使い方など、生徒が使えるツール	実際の LIFE のシミュレーションが必要	
例えば LIFE の使い方モデル、実際に現場に出て即戦力としてというご要望がもしあるのであれば、生徒が使えるツールものもあるといい	LIFE の使い方など、生徒が使えるツール		
資料集だけだと、うーん？と、生徒はこれに意味があるのというふうに思うかもしれない、実際の現場に近い形で何かシミュレーションができるようなものがあるといい	実際の現場に近い形でシミュレーションできるようなもの		
でも目で見るのは得意、耳で聞くのはどんどん苦手になっていく、視覚的な方が得意な子が多い	視覚的な方が得意な子が多い		
ドキュメンタリーじゃないけど、LIFE を用いて実際に介護過程を 1 年間やってみたらこうなりましたみたいな、生の情報に近い教材みたいな動画	LIFE を用いて介護過程を 1 年間やったらこうなりましたという動画		
教育に活用するということになると意見が出ていたのは、演習事例として私たちが持っている事例にどんなふうに、まずは情報として落とし込んで見せてあげるか	演習事例	LIFE の具体的事例が必要	
演習事例に LIFE をどう入れていくかというところがまず最初の課題であります	演習事例に LIFE をどう入れていくかというところが課題		
授業の中で、この部分で活用したら、この視点を使ってみたら学生が分かりやすかった、理解がしやすかった、例えば誰が見ても客観的に評価できるような目標が立てられるようになったとか、実際の事例も集めていくことが大事	実際の事例も集めていくこと		

LIFEを教育に活用するにあたっての課題	コーディング	中項目	大項目
事例が少ない	事例が少ない	LIFE の具体的事例が必要	事例
事例少ない、私たちも何をもって、中央法規のはいまいち分かりづらかったりするので、それが LIFE のこういうのにあると	LIFE の事例があるとよい		
現場の教員は事例があると使いやすい	教員は LIFE の事例があると使いやすい		
もっと事例を取って、その事例から LIFE というものの理解につなげるというのが、現場の先生方の 1 つの課題になる	事例から LIFE というものの理解につなげる		
リアリティーある事例にどれだけ取り組めるか	リアリティーある事例に取り組んで、思考過程を経験し、蓄積していけるか		
事例にどれだけ取り組んで、思考過程を経験していけるか	事例で思考過程を経験しできるか		
事例集があったらいい	LIFE の事例があるとよい		
本当にそういう、動画でもいいんですけど、さっきおっしゃった表情ですとか、声の大きさとか、そういうのって本当文字では伝わらなくて	表情、声の大きさは文字では伝わらない		
例えばアシストする意味でも、介護過程の授業をしていて、テキストが具体的に LIFE を用いた介護過程の事例集として作られて、そこにやはり QR コードとかでデータが入れられる	具体的に LIFE を用いた介護過程の事例集	LIFE を用いた教材が必要	教材
LIFE に特化したということで、バーセルインデックスの入力だったりとか、LIFE の初期画面みたいなものが見えるようなのがあれば	バーセルインデックスの入力や LIFE の初期画面が見える		
理想ですけどね、学生がそれで学ぶ、実習に行ったらそれを使っている、戻ってきてそれでまた学ぶ、そして就職したら本格的に本当にそれを使う	実習でも就職後も実際に使える		
共鳴するときって学生の受け取るタイミングなんです、こちらが伝えたいタイミングじゃない、受け取って、そのタイミングに、よくいい球を投げてやれるかどうかだけだと思うので、学生が学びたいといったときにアクセスできるものが、いつでも、今の学生ならではの、「TikTok」だったりとか、そういったもの	学生が学びたいときにアクセスできるもの	動画教材が必要	
「YouTube」も生徒は食い付く	「YouTube」		
私たちが作った介護過程のガイドブックも、学生がいつでも閲覧できるようにしておくのも必要かもしれないなということは意見が出ています	学生へのテキストの中に LIFE	副教材	
日々記録だとか個別援助計画がクラウドでできるといい	日々記録、個別援助計画がクラウドでできるといい	有効活用のための情報共有のあり方	
知見は積み重なってきてはいるようですが、これを導入して何がもたらされたのかという具体が、もっと明確に説明ができなければ、教材として用いるのはもしかしたらまだ難しいのかもしれない	導入効果が明確に説明ができなければ、教材として用いるのは難しい	導入効果の明確化が必要	その他
デメリットも含めて、情報がもたらされるメリットと困難さのようなものが共有されてくれば、より誠実に学生に使う教材として用いやすくなるような気がする	メリットと困難さについての共有が明らかになれば教材として用いやすくなる		
LIFE が変わっていくごとに教育がころころ変わるというのも困る	LIFE に連動して教育が変わるのは困る	その他	
学生からは、コードを毎回見ないと分からなかったりするという面では、実習で使おうと思うと、持っている資料を持ってないと分からないとかいうのがデメリットになるという意見があった	コードを毎回見ないと分からない		